

最優秀賞

兵庫県

多可町立加美中学校 三年

谷 尾 慧 奈

ありがとう消防団

あの災害から三年……。私は思いもよらぬ体験をしました。

私の家族は父、母、祖母、弟そして私の五人家族です。当時父は地元の消防団に入っていました。平成二十三年九月。台風十二号が日本を襲いました。私の住んでいる地域でもだんだんと雨が強くなり、父は「集落内の見回りに行ってくるわ。」と消防団へと行ってしまいました。時間が経つにつれて強くなる雨。父が無事に帰ってくることを願いました。私はその夜自分の部屋で、台風による雨音に不安を感じつつもいつものようにベッドで眠りにつききました。夜十二時前頃のことです。

「慧奈！起きて！ここにおいたら危ないから逃げるで！」

母が私を起こしました。急に起こされ何が起こっているかも分からないまま、母と弟と祖母と私は車に乗り込みました。外は、ものすごい雨の音と近くの川で大きな石が転がる音が聞こえてきました。車から見える道路はまるで川のようになり、脇には山から流れてきた土砂や木がいっぱいでした。それから私の目に飛び込んできたのは、雨の中でヘルメットやカッパ、長靴を身に付けた男の人たちの姿です。このときすぐにこの人たちは消防団の方々だと分かりました。避難所に着いた私は自主避難だったということを知りました。

私はそんなに危なかったのだろうか、まだ避難勧告さえ出ていないのになぜだろうと思いました。その日は自主避難所で一晚を過ごしました。

家に帰った後、私は父に詳しいことを聞きました。話を聞いている中で一番印象を受けたことは消防団の方々の方です。私たちが自主避難をした理由。それは、公会堂の横のえん堤から土石流が道路へ流れ込みそうになり、その道が寸断されれば孤立状態になってしまふ可能性があったため、区長さんと消防団の方々の判断で自主避難するように集落放送とサイレンで村の皆さんに呼びかけをされたそうです。なかには自分で避難できない高齢者の方がおられたので消防団の方が大切な命を守るために、寝ておられるところを起こしに行かれたそうです。しかし夜中で雨音が激しく聞こえなく、ガラスを割って家の中へ入られたそうです。そしてその後、おばあちゃんには消防団の方に連れられて私たちと同じ自主避難所に避難されました。他には台風が通りすぎた後も秋雨前線の影響で水と土砂が出ている集落へ戻り、夜を徹して土木業者の方と一緒に車を通してやるように土砂の撤去をされました。この話を聞いて、消防団の方々や村の役員の方々の勇敢な姿と判断が村を守る大きな力になっていたんだなと思いました。消防団の方々がおられなければ私が住んでいる集落はどうなっていたでしょう。本当に感謝の気持ちでいっぱい입니다。私も地域の防災訓練などにも積極的に参加しようと思います。

